もう、暗かった。
明日は学校だ。

「それにしても、もう一人の子は誰やろ。」
寝ながら、その子のことを思い出していた。
「えらい奴やなあ、僕にはそんな勇気はない。」

彼女が、別の男子生徒と
親しそうに話しているだけで、
「もう、ボーイフレンドでも出来たのかなあ。」
と、僕はがっくり来てた。

その間に入って、
自分の気持ちを伝えるなんて、
絶対、その子のような事、僕には出来ない。

彼女がバス停で、僕を見つめていたとき、
そこに割り込んで来たその子の顔を、
僕は思い出していた。

「少しは、僕も勇気を出して、
その子を見習わなきゃあかんのかなあ。」
そう思ったが、しかし、それだけでなく、
なぜか、気残りで、その子がかわいそうになった。

僕が彼女に手紙を渡している姿を
目撃して泣いているその子を想像した。
「ごめんなあ。」
そう言って、僕は目を閉じた。